

「三角形」「四分音符」も漢字で書けばよくわかる

会話の中で耳慣れない言葉や紛らわしい言葉が出てくると、「それはどういう字を書くの？」と確かめて、それではじめて意味がわかるということが、私たち大人にもよくあります。この場合の「字」とは、もちろん漢字のことで、音だけしか表さないひらがなの綴りを聞いても、まったく用をなしません。

これは、子どもでも同じです。たとえば、算数でも、最初から「さんかくけい」ではなく「三角形」と数えれば、「ああ、角が三つある形のことを言うんだな」とはっきりとイメージすることができます。

音楽で使う「四分音符」「二分音符」という言葉もそうです。これを「四ぶおんぷ」「二ぶおんぷ」といった中途半端な表記で数えてしまいますと、子どもは「算数だと四と四を足せば八なのに、音楽では何で四分音符と四分音符で二分音符になるんだろう」と混乱するばかりです。

それよりは、はじめから「四分音符」「二分音符」と表記し、一つのもの(全音符)を二つに分けたのが二分で、四つに分けたのが四分だから、四分音符を二つ合わせたものが二分音符になるんだと説明してあげれば、簡単に理解できて間違ってもないのです。

また「動物」という言葉は、幼児はもちろん、小学校高学年の子どもでさえ、犬や猫、猿、熊、ライオンなど、いわゆる“獣”のことだと理解している場合が多いものです。ところが、以前、私が小学一年生の担任をしていて、教科書に出てきた「どうぶつえん」という言葉を、「動物

園」と漢字で書き直して見せたときのことです。子どもたちが「先生、『動物』って“動く物”って読めるね」と言うので、「そう、生き物には、本や花のように動けないものと、象や猿のように動けるものがあるんだ。それで、動ける生き物は“動く物”と書いて『動物』って言うんだよ」と教えてあげました。

すると、子どもたちから「じゃあ、金魚も動物なんだね」「蟻さんも動物なのか」「先生、それじゃ、人間も動物なの？」と次々と感嘆の声や質問が飛び出し、あっという間に「動物」という言葉の概念を理解してしまったのです。

自ら疑問を発し、ほんの少しヒントを与えられることで、自ら答えを導き出していく。これこそが、本当の生きた学習と言えるのではないのでしょうか。これも、最初から“漢字で”教えるからこそできるものであり、こうして得た知識は決して忘れることはありません。

今挙げたのは、小学一年生の例ですが、幼児でも五歳児くらいになると、理屈で考える力がかなり育ってきていますから、漢字教育を続けていますと、これくらいのことは十分に理解できるようになります。